別紙様式３(修士申請者用)

(西暦)２０１９年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名(注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

臓器移植看護の倫理的場面におけるレシピエント移植コーディネーターの苦悩の構造とその関連要因

学位の種類：　修士(　　看護学　　)
首都大学東京大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　看護科学域
学修番号　18894701
氏　名：　阿部　育子
(　指導教員名：　習田　明裕　教授　)

日本では脳死下での臓器提供が極めて少なく，肝臓・腎臓移植では生体臓器移植が８割以上を占めている．さらに，移植医療の発展に伴いこれまで適応にならなかった移植が可能になったことで倫理的問題が複雑化し，医療者が倫理的課題を抱くようになった．そのような中で，移植医療における倫理的調整役としてのレシピエント移植コーディネーター(Recipient Transplant Coordinator, RTC) の重要性が明らかにされている．しかし，レシピエントと生体ドナーという立場の異なる二者の存在を，同時にケアの対象とする倫理的課題などにより，RTC 自身が苦悩している状況が懸念されながらも，RTC の苦悩の構造やその関連要因を明確にした研究は少ない．

【目的】臓器移植看護の倫理的場面において RTC が抱く苦悩の構造を探るとともに，その関連要因について明らかにする．

【方法】全国の移植施設に勤務する認定・非認定 RTC を対象に選択式質問紙調査を実施した．臓器移植看護における倫理的場面を「臓器移植全般」「生体移植」「脳死移植」の３つの領域30場面を文献などから抽出し，経験の有無と苦悩の状況を測定した上で，その構造を探求するために探索的因子分析を行った．得られた因子の下位尺度得点を目的変数とし，[個人特性]，[RTC 特性]，[環境特性]，[倫理特性]を説明変数として重回帰分析を行った．

【結果】RTC 84名（回収率45.7%，有効回答率100%）を分析対象とした．各倫理的場面における苦悩の程度が最も高かった場面は，『脳死ドナーの家族が十分に意思決定を行える時間のない状況で決断をしなければならないことがあった』であった．また，RTC が半数以上経験した23場面について探索的因子分析を行った結果，【移植医療の不確かさ】，【RTC としての自信のなさ】，【倫理的責務の障壁】の３つの因子構造が示された．各因子の下位尺度得点を目的変数とし，倫理行動に関わる項目を説明変数とする重回帰分析を行った結果，説明率は1.4～19.3%と低かったものの関連要因として『立場』，『RTC 経験歴』，『担当移植件数』が示された．

【考察】RTC が抱く苦悩の構造には，第三者の臓器提供により成り立つ医療でありながら，期待された成果が保証されていない【移植医療の不確かさ】や，担当移植件数の少なさや一人体制で勤務をすることによる【RTC としての自信のなさ】などが存在していた．そして，関連要因に『RTC 経験歴』，『担当移植件数』が示されたことから，RTC として様々な倫理的問題を解決していきながら経験を蓄積することが，専門的技能を得るために必要な条件であることが明らかとなった．また，複数の RTC が存在するなかで，経験や苦悩を共有しながら倫理的問題について検討を行うことが必要であることが示唆された．